

アノニム『恭しき娼婦』

今回アノニムが取り上げたサルトルの『恭しき娼婦』は1946年パリで初演の決して新しくはない作品ですが、世界各国で強まる愛国意識を直接的に連想させるもので、まさに今、取り上げるべき作品だと感じました。

最初は真実を語ろうとする娼婦リッジーが、偽の証言をすることで自分が「家族」の一員になれるかもしれないと考えて虚偽の証言をする心の動きに、人の心の複雑さを感じました。劇中で上院議員がリッジーに言う「署名すれば、この町全体がお前を養女にするんだ。この町中がだ。この町中の母親たちがだ。」という甘言からわかるように、「家族」で例えられているのはアメリカ国家です。真野斗志子の熱演により、国家と個人の間で揺らぐリッジーの姿がしっかりと立ち上がり、現代を生きる善良な所謂「一般人」に重なりました。非常に考えさせられる上演でした。

戯曲はほぼ原作通りだったようですが、腕輪が最初に登場する場面を削除したことにより、リッジーと腕輪の関係性がやや不明瞭になり残念でした。あの場面では腕輪が蛇の形をしていることを強調する場面で、それによってキリスト教的思想の文脈が戯曲の背後にあることが明確になります。他の箇所でも蛇への言及はあるため、全くわからないことはないのですが、短いセリフですし、残しておいても良かったのではないのでしょうか。

演出では、人種を演じ分けるために黒い仮面で黒人を表現した点と劇冒頭の掃除機をかけるリッジーの姿を紗幕に写す仕掛けに工夫を感じました。美術も無駄がなく、丁寧に劇世界を彩っていました。

一点、劇最後に怪しげな雰囲気仮面の男女たちがリッジーとフレッドを囲む場面の追加は、急に直接的なメッセージを打ち出されたように感じて違和感を覚えました。それまでの劇世界がセリフの中の暗喩で巧妙に構築された多重世界であったが故に、劇最後に追加された場面の直接性が乖離しすぎていると感じてしまったのです。虐げられた者たちが復讐を狙うという復讐の連鎖の構図の提示という意図は受け取ることができたのですが、表現の仕方には再考の余地があるように思いました。

戯曲の選択や演技、演出、それぞれが非常に考え抜かれた力演であったと思います。劇団が今の社会の中で何を問題視しているかがよく伝わりました。次の公演も楽しみに待っております。

(担当：岡田路子 大阪大学大学院演劇学研究室)